

令和4年度事業報告

特定非営利活動法人ゆう

令和4年度全体総括

令和4年度は、新施設への引っ越しを行い新たな拠点での活動を始める年となりました。利用者さん、ご家族の協力もあって、無事引っ越しでき、笑顔で過ごす利用者さんの顔を見てるとほっとします。建設・移転にご協力いただいた皆様には感謝しかありません。新施設は「顔の見える施設」がコンセプトでした。まなびんやゆうの庵などで活用したりしながらいろいろな方が集える場所としてスタートしています。ゆうの庵は、定期的に開催され、保護者の憩いや学びの場となっており、地域の貴重な場となっています。オープンスペースは、職員同士や利用者さんと他事業所のスタッフなどの交流も少しずつ生まれています。

新型コロナとの向き合い方も変化があり、ZOOMなどの非接触のツールの活用はもちろんのこと、対面での活動も再開の動きが見えました。学校からのキャラバン隊の依頼なども復活し、顔を向き合わせての地域啓発ができる機会がうれしく感じました。子どもたちとの啓発の時間は貴重な時間となりました。希望スタッフがキャラバン隊員として参加できるように勤務も調整してできました。こうした啓発はゆうの大事な活動の一つとして多くのスタッフが参加できよかったです。

福祉事業は、どの事業所も一人ひとりを大切にした支援が行えました。その支援をスタッフみんなで共有したいと、スタッフ全体研修で事業所の実践発表を行いました。障害特性に応じてできることを増やし、生活への安心と自信を作っていく支援が行えたと胸を張って言えるそんな実践ばかりでした。よい支援ができていることはゆうの大きな強みであると思います。

一方、近年慢性的な職員の不足に悩まされています。雇用をめぐる環境がここ数年で変化してきました。採用活動の見直しをしていかなければならないと痛感しています。

NPO法人ゆうは、スペシャルニーズのある方々とそのご家族が地域でありのままに自分らしく暮らしていくための取り組みを続けています。ゆうでは、障がい理解や科学的に実証されている手法を用いて、一人ひとりへの配慮や支援を行っています。令和4年度の各事業は、ありのままに自分らしくの理念のもと会員・スタッフの想いを乗せて、みんなに寄り添いしっかりと行うことができました。

理事長 豊田和浩
令和5年3月31日

< ゆうが活動の柱としている考え >

理念「ありのままに、自分らしく」

スペシャルニーズのある方の想いに沿ったサポートをします。

スペシャルニーズのある方にあたたかいまちづくりを目指します。

スペシャルニーズのある方の支援を、ご家族とともに考えていきます。

スペシャルニーズに関する情報発信とネットワーク作りをします。

スタッフ行動指針

NPO 法人ゆうスタッフは以下の行動指針に沿って支援・活動を行っています。

1. 利用者・家族・スタッフ・地域の方々など、すべての人を尊敬し尊重する姿勢を持ちます。
2. 利用者のありのままを受け入れ、本人主体の支援を行います。
3. 利用者の将来を見据えた支援を行います。
4. 利用者の心の声を聞き、強みや得意を活かした安心感のあるかわり方を、本人・家族とともに考えます。
5. 自分の仕事に誇りと自信を持ち、向上心を忘れず、変化を恐れず行動します。
6. 思いやりや気配りをもって、チームで支援を行います。
7. 自分のふるまいが、あたたかい地域づくりにつながっていることを常に意識します。

令和4年度の事業

令和4年度事業は以下の体制で行った。

人づくりまちづくり部門

講師派遣・アドバイザー派遣・講演会等

- 講師・アドバイザー派遣
- 講演会など
- 行政からの委託事業（ペアレントトレーニング、新城市保育士研修など）
- ゆうキャラバン隊派遣

学習会・茶話会

- まなびん・ペアレントトレーニング・おうちでできるお膳立て・ゆうの庵

サークル

- きょうだいの会
- クローバーの会
- 市民活動団体・研究会の事務局委託
自閉症啓発キャラバン Swing・穂の国 PECS サークル・TEACCH とよかわ

相談部門

- ゆう相談支援（児童相談支援）
- 福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導

直接支援部門

- ゆうヘルパーステーション（短期預かり、福祉移送、行動援護、移動支援）
- ゆうサポートセンターどーや（生活介護）
- ゆうサポートセンターとことこ（児童発達支援）
- 豊川市児童発達支援施設ひまわり園（児童発達支援、保育所等訪問支援）*指定管理
- ゆうサポートセンター（児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援）
- ゆうショートステイとれ☆きゃん（短期入所、日中一時支援）

本部事務局

- 法人事務管理

人づくりまちづくり部門

今年度は新型コロナの感染防止対策を行いながらの活動となった。

講師派遣・アドバイザー事業・講演会等

- 依頼側の意向に従って、対面及びオンラインで行った。
 - ・新城市療育実践研修（対面）
 - ・新城市ペアレントメンター研修（対面）
 - ・豊川市「叱らずにすむ子育て」（対面）
 - ・豊川市「ティーチャーズトレーニング」（対面）
 - ・豊川市子育てネット「子育てサポーター養成講座」（対面）
 - ・サービス管理者・児童発達支援管理責任者研修 基礎・実践・更新研修
 - ・強度行動障害支援者養成研修（国研修）
 - ・愛知県障害者虐待防止研修
 - ・ジョブシテカレッジ障害講座
- ゆうキャラバン隊
豊川市社会福祉協議会の福祉実践教室のメニューとして学校から要請によりキャラバン隊を派遣した。

6月23日	平尾小学校	6年生	2コマ
9月7日	国府小学校	5年生	
9月13日	桜木小学校	5年生	

学習会・茶話会

- まなびん
年10回ZOOMと現地のハイブリッドにて開催した。地域の施設職員、保護者、ゆうの新人スタッフが参加している。
- お膳立てとペアレントトレーニング
新施設のオープンスペースを利用して開催した。
- ゆうの庵
ゆう親の会「クローバーの会」主催で「ゆうの庵」を開催した。「不登校・登校しぶり」「支援学校」「小学校ってどんなところ?」「ゆるっとふわトーク」など5回の茶話会を行った。講師を招いて「リラックスヨガ」も行った。延べ45名が参加している。

サークル

- きょうだいの会
障がいや発達につまずきのあるきょうだいがいる子どもたちが、普段できないいろいろな体験をし、きょうだいのことを普通に話せる友達作りを目的としている。今年度は感染防止対策を行い、年2回開催した。
 - ・クリスマスパーティーをしよう★
 - ・掛川花鳥園に行こう！

市民活動団体・研究会の事務局委託

➤ 自閉症啓発キャラバン Swing

ZOOMでの定例会（毎月）をZOOMにて行った。また、啓発公演については、対面で小中高向けに5回行った。

➤ 穂の国 PECS サークル

ZOOMと現地のハイブリッドで定例会を開催した。5月、7月、9月、11月、1月（セミナー）、3月

➤ TEACCHとよかわ

ZOOMにて毎月事例検討会と実践報告会を行った。10月と11月に講師を招いて冰山モデルとABC分析の連続セミナーを行い、それを活かして事例検討を行った。保護者の参加が多く、活発な検討会となっている。

相談部門

障害福祉サービス 相談支援事業所

公的支援の相談部門の報告は以下の通り。

事業所名	ゆう相談支援	管理者	荻野 ます美
_____	_____	現場責任者	荻野 ます美
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>令和4年10月より、名称を「相談支援 Kids ふぁ～すと」から「ゆう相談支援」へ変更した。理由は、近隣市町に事業所名に「Kids」が入る児童発達支援や放課後等デイサービスが増えてきて、混乱を避けるためと、「Kids ふぁ～すと」の「障害の有無に関係なく、まず子どもとして関わる」という意味が伝わりにくくなっており、「子ども最優先」「子ども第一主義」と誤解されることが増えてきたためである。</p> <p>基本相談については、不登校と登校渋りに関する相談が多く、すぐに福祉サービスにつながるケースはあまりなかったが、切羽詰まった深刻な内容が多く、対応が非常に難しかった。療育相談での継続支援に繋いでいるケースが増えている。</p> <p>計画相談については、コロナ感染予防のために、ご自宅への訪問をせずに電話での聞き取りや法人内の相談室で面談を行った。事業所へのモニタリングについては、訪問先の意向や方針に従って行った。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後デイの通所を断られたお子さんたちについて、地域資源が限られる中、保護者や関係機関と協議しながら、本人にとって現状できうる限りの環境になるように相談援助を行うことができた。 ・フリースクールのスタッフやスクールカウンセラー等と連携をとりながら登校渋りや不登校のお子さんや家族への支援に取り組むことができた。 ・不登校になっているお子さんの保護者への定期的な面談（私的サービス）3年を経て、家族の意識が変わり、お子さん本人の意欲が徐々に高まり、サービス（公的支援）につなぐことができた。 ・入院や施設入所になっているお子さんについて、児相や子育て支援課等と会議を重ねながら家族支援を行うことができた。（令和4年度は児相と比較的良好な関係をつくることができた） 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・相談支援専門員が足りないため、ニーズがあっても新規の方を取るのが難しい。 ・通所の可否や通所日数などを民間の事業所都合で決めることが当たり前になりつつある豊川市の情勢の中で、公平公正とお子さんの最善の利益をどのように考えて支援して行くべきか、事業所としての方針をかためることができていない。 		

	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の就労確保を優先することが一般的になりつつある社会情勢の中で、お子さんの最善の利益をどのように考えて支援して行くべきか、事業所としての方針をかためることができていない。 ・サービス終了とともに計画相談が終了となる利用者さんについてどのようにリファーマすべきかのマニュアルができていなかった。
--	--

私的相談

福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導

ZOOMでのオンライン相談と感染防止対策をした上での短時間の対面相談を行った。

相談担当者 5名

対面 41回 オンライン 10回 電話、メール 5回

直接支援部門

公的支援の直接支援部門の報告は各事業所より以下の通り。

事業所名	ゆうヘルパーステーション	管理者	豊田 和浩
サービス提供責任者	門之園 由美	現場責任者	門之園 由美
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>コロナ感染によるキャンセルはありながらも、感染対策をしながら以前のように遠出や地域のイベントへ行ったりと、利用者さんの余暇の充実を図れるように取り組んできた。新規の受け入れや在宅の方の外出機会を設けられるように努めてきた。年度途中でスタッフの退職や休職もあったが、ヘルパー内で協力しながら日々の業務にも取り組むことができた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナウイルスの状況をみて落ち着いた時期には、以前のように日帰り旅行や遠出のお出かけをすることができた。 ・新規の方の受け入れ。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急事態宣言の発令や身近での感染者増加に伴い、キャンセルで空きができたところに追加の支援を入れることも難しく、大幅な赤字に繋がってしまった。 ・年度途中のヘルパー休職に伴う人員不足で、毎月数名の方に利用回数を減らすことや時間短縮をお願いしている。また、新規利用の問い合わせもあったが、お断りもしくは待機をして頂いている状態である。 ・ヘルパー個々での話し合いはあったが、ヘルパー全体での会議時間を設けることが中々出来なかった。 		

事業所名	ゆうサポートセンタードーヤ	管理者	岡部 祥子
サービス管理責任者	岡部 祥子	現場責任者	岡部 祥子
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>夏に利用者が1名途中退所となり、それ以降からは利用者7名で実施。事業所の引っ越しがあり、今までドーヤだけの建物で活動していたが、本部や他部署と一緒にすることで刺激が増える環境となった。空間的にも狭くなり、環境設定に苦慮した。特性や利用者の相性、その人にとっての必要な部屋の広さを考えながら、配置を考えていたものの、うまくいかないことが多く、数日ごとに環境を変えていく日々が続いた。引っ越しに伴い送迎ルートも変更となり、ルート・時間・相性を考慮して再度組み直したため、利用者にとっては変化が多い年ではあった。環境の変化に伴って出てきた問題行動に対して、想定外の動きに対しては対応が後手に回ってしまうこともあり、不穏状態にさせてしまったこともあったがその都度、MTなどで相談・共有しながら進めることができた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、祝日営業を数日行い、ほぼ全員の方が祝日も変わりなく通われた。そのため、年間通して休みが続くことでの不安定を招くことなく、利用者が安定した1年を過ごすことができた。 ・自主製品作りではポチ袋を中心に販売を行った。特にお年玉シーズンには、チラシを作成し注文受付を行ったことで沢山の注文を受け、利用者の作業提供・工賃を増やすことが出来た。又、自主製品を販売することで、地域の方々への利用者のイメージアップにも繋げることが出来た。 ・コロナ禍の状況が続いたため今年度も活動に制限が生じた。が、その中でもスタッフが知恵を絞り、実施したことで、利用者の楽しみも継続して提供することができ、スタッフも利用者への理解を深めることが出来た。今年度は久々に外食を1度、慰安旅行は電車を利用して名古屋港水族館へ行った。電車利用は数年ぶり、地下鉄は人生初めて乗るという方も数名いる中、スタッフが一人一人の手立てを考え、事前準備を万全にしていたことで、無事行って帰ってくることができ、利用者にも笑顔がみられた。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・パニック状態になってしまうと他の利用者に向かっていく方や、スタッフに対して他害を行う方がいる。そういった状態になったときに力の強い利用者なので止められるスタッフが限られることも多く、又、他害に関しては怪我をしてしまうスタッフもあり、スタッフの精神的重さの軽減。 ・「音」が課題となっている利用者が多い。ドーヤエリアが狭くなり、エリア内だと音の反響もあり、より声等が響く環境となった。狭さもあるので、誰と誰を同じエリアにするかが、可能な組み合わせが少なく、一人一人のベストな環境ができていない 		

事業所名	ゆうサポートセンター とことこ	管理者	十都 敦子
児童発達支援管理責任者	十都 敦子	現場責任者	十都 敦子

令和4年度の実施総括

令和4年度は、利用児15名（内、年長児8名、年中児6名、年少児1名）

今年度は新施設への引っ越しがあったため、利用児さんには計画的に新しい場へ慣れる練習を行った。その結果、全員混乱なく新施設での療育をスタートできた。今年度も2クラスに分け、少集団（5～6人）での療育を行った。新施設では、2クラスに分けているが、活動等は利用児さんの発達段階や状況により、柔軟なグループ分けを行い支援を行うことで、お子さんの成長に合わせた支援が行えた。運動会も、ねらいを確認したうえで、新施設内で2クラスに分け行った。新しい環境から良い刺激をもらっている利用児さん、賑やかさに戸惑う利用児さんもおられたが、今年度も一人一人の成長した姿が見られた。

今年度の成果

- ★自立の場面、素敵な行動へのトークンなどを積極的に取り入れ、自己肯定感が持てるような関わりを重視した。模倣や語彙を増やす試み等を増やした。語彙が増えてきたクラスでは、きらきら言葉、とげとげ言葉の取り組みを行った。
- ★担当を中心に現場スタッフの意見を積極的に聞き取りながら取り組むチーム支援が多くあった。
- ★個別課題の時間を増やし、個々の学びを広げ深めることができた。その結果、自立課題の充実にも繋がった。
- ★引っ越しという大きな変化がありながらも、スタッフやご家族のご協力のもと、スムーズな新施設への移行が行えた。
- ★運動会では、自立課題からヒントを得た種目、今子供たちができることを取り入れた種目が多くあり、保護者からの温かい応援をいただいた行事となった。
- ★保護者自身に実践していただくことを意識した保護者支援で能動的に取り組む保護者が多くおられた。
- ★保護者会では様々な思いを持たれた保護者同士の交流の機会を増やすことで、学び合い、支え合いの姿が多くみられた一年となった。

事業所の課題

- ・個別支援計画を現場スタッフ全員で周知し、アセスメントを元に支援の見直しを行う。
- ・子供の芽生えや困り感をタイミングよく掴むために必要な情報を継続可能な形で記録する方法の定着、情報共有のためのシステムを継続して回していく。
- ・必要な書類、必ずしも必要ではない書類を分類し、作成する書類を減らす。内容もねらいに応じて絞り、作成時間を短縮する。
- ・スタッフの意欲と現場の支援力 up にも繋がる一人一人のスキルアップ。
- ・加算について整理し、対象となるサービスは加算を申請していく。

事業所名	豊川市児童発達支援施設 ひまわり園	管理者（園長）	丸山 尚美
児童発達支援管理責任者	丸山 尚美 森川 せつ子	現場責任者	丸山 尚美
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>令和4年度は4つのコース（2歳児、2歳児待機、園・療育併用午前、園併用午後）で療育を行った。利用者のニーズの変化により後期は特に2歳児の利用児が大きく減少した。</p> <p>令和4年度も児童発達相談センターが見学調整や同行、福祉サービスを受けるまでに必要な一連の流れをセンターが担ってくれることで役割分担をし、連携を密に行ってきた。</p> <p>引き続きコロナ禍の療育で制限はあるものの、できる範囲で楽しく様々な経験ができるように活動の提供に努めた。保育所等訪問支援事業では、園と保護者、ひまわり園の三者で、子どもの課題や支援の方向性を確認し、共有することができた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・後期のAコースにつながる2歳児のお子さんが少なかったため、後期にはクラスを再編成して週2日通えるフォローコースを設定した。年間を通して週2日通うことで、子どもは経験を重ねることができ、保護者も同じ悩みを持つ保護者同士が親密な人間関係を築くことにつながった。 ・園併用コースが増え家庭連携加算を使って園での姿を確認し、園でのお子さん自身の困り感が大きいと感じられた場合には、必要に応じて保育所等訪問支援につなぐようにした。 ・午後コースはトークンや集団あそびを取り入れるなど工夫をした。スケジュール提示や気持ちよくおしまいをして次の活動に移ることができるようにする、お子さんの姿によっては小集団よりも個別で関わることでわかる環境の中で大人の指示に応じてよかった経験を積むことができるように支援をしてきた。 ・保育所等訪問支援事業は、利用ニーズは多いものの、年度途中での訪問支援員の退職もあり、きめ細やかな支援を維持・継続するために新規利用の受付を一旦制限した。限られた訪問支援員で療育の質を落とすことなく保護者の思いをお聞きして園での様子を伺い支援内容の共有をした。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・働く母が増え、子どもに対して療育の必要性を感じてはいるものの、療育に通うことが就労条件の一部にはあたらないため療育を欠席する日数が増えている。 ・業務内容が増え残業がある。様々な視点での業務改善が必要。 ・保育所等訪問支援事業では、訪問支援員の人材の確保と育成が難しい現状がある。 		

事業所名	ゆうサポートセンター いまーじゅ	管理者	浅田 多世
児童発達支援管理責任者	大橋 美保（鈴木 弥聡）	現場責任者	鈴木 弥聡
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>1～4歳児の親子の個別療育を行った。個々の発達に合った取り組みを行い、子どもの「できた」「わかった」「伝えて良かった」を増やす支援を行った。直接子どもの様子を見ながら行動の理由を解説した。お話を聞きながら、シートに記入しながら、文章にまとめて確認しながら、丁寧に関わり方のコツを伝える保護者支援を行った。</p> <p>豊川市児童発達相談センターができ、親子がいまーじゅへとつながる流れが変化。以前は4月は数名の利用のみで5月以降徐々に利用児が増えていたが、令和4年度は定員ほぼ満員でスタートした。集団に入るにはまだ早いお子さんの学びの場として、我が子の関わり方に悩む保護者の相談できる場として、個別親子通園の必要性を強く感じた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ● 保護者に診断がついている・保護者の不安がとても強いなど、より一層保護者支援に難しさを感じた年だった。ミーティングでは保護者への伝え方や伝えるタイミングをスタッフ同士よく相談し合った。 ● 保護者が実際に家庭で対応できるよう、子どもの姿をとらえるポイント・子どもの心の声を考えること・うまくいく対応のコツをいまーじゅの中で解説した。保護者には家庭でも同様に考えて家庭用プログラムに記入して頂き、利用日にスタッフと一緒に振り返りをする事で、徐々に関わり方のコツをつかみ、スタッフの助言がなくても保護者自身がお子さんに合った対応を考え、実行できる姿につながった。 ● 年度の後半では季節の行事を行った。それぞれの「わかること」「楽しいと感じること」に合わせて計画、実施し楽しむ機会を作った。いつもと違う活動を行うことで、新たな子どもの特性や関わり方のコツ、保護者の困り感に気づき、日々の療育へ活かした。 ● 今年度も1人、保育所等訪問支援を行った。園での生活を見て保護者に報告し、子どもが伸びる環境の提案をしたことで、我が子が学びやすい環境へと保護者自身が考え進路選択することができた。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所等訪問の必要性は感じているが、定員満員の状況では利用を増やすことが難しい。 ・スタッフが休むことで他事業所からフォローを要請する必要がある為、スタッフの心持ちとしては休みを取りづらい現状がある。 ・効率よく仕事をすすめる仕組みづくり。新施設引っ越しの時に療育の準備・片づけの時間短縮を考え実施。次は事務書類の効率化を検討したい。 		

事業所名	ゆうサポートセンター ほっとそと	管理者	浅田 多世
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	大橋 美保
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>令和4年度の利用児は35名（内、終了・卒業児：6名）。中学校入学や進級後の生活の変化に伴って終了となる児童が多かった。</p> <p>今年度は、事業所の移転に伴う引っ越しがあったが、タイミングを考慮することで、できる限り利用児に影響が少ない日数で執り行うことができた。また、コロナ禍における制限はある中、感染症対策は行いながら、少しずつ外出活動等や集団での活動も増やし、新たな活動にも取り組んだ。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの様子や心の声に合わせた活動の提供や関わりを行うことで、集団での活動が難しい児童が集団活動へ参加できたり、スムーズに保護者と分離できることが増えた。 ・メインの活動だけでなく、自由参加の活動として、ドッジボールやしゃぼん玉等を設定し、子どもたち同士でルールを決めたり、交渉したり、やりとりできる機会を増やすよう意識した。 ・移転に伴い、事業所の間取りや設定も変化した。子どもの動きや様子を見ながら、どこに何を設定すると子どもたちが自信を持って行動できるかをスタッフで検討し、構造や環境を設定した。まだ改善すべき点はあるが、整ってきている。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・引っ越しに伴い、必要な環境調整等、まだ必要な所がある。引き続き行っていく。 ・少人数で業務を回しているため、一人のスタッフが担当する業務が多くなっている。また、スタッフの異動に伴う負担も来年度は多く予想される。無理なく長期的に業務を継続できるために、業務の見直しや効率化を行う。 		

事業所名	ゆうサポートセンター じょいん	管理者	浅田 多世
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	太田 章乃
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>令和4年度は引き続き新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた一年となりましたが訪問件数はコロナ感染拡大以前には戻っていません。理由として難しいケースが増え、一回の訪問で回れる利用者数が限られてしまうところがあることと、多機能の事業所なので4年度はフォローに入らないといけない場面が増えたことや少ないながらも相談支援事業所との兼務が増えたことも関係しているかと思われます。毎年行っている小学校対象に行った年度末のアンケートでは、じょいんの訪問支援が「役に立った」が94%を超え、頂いたコメントからもじょいんの支援が役に立ったといったお声を頂き、限られた訪問件数ではあったが、一定の質を保って支援を行うことができたと考えている。</p>			
今年度の成果	<p>今年度の重点目標から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「小学校との連携を丁寧に進めていくと共に学校教育課との更なる情報共有の強化に努める」：アンケート結果からも小学校との連携を丁寧に進めることはできたと考えられ、また学校教育課からも個別のケースについてじょいん宛てにお電話頂き、訪問に同行してもらうことが2回ほどあり、学校教育課との情報共有の強化は図れたと考えている。 ・ 「訪問支援のマニュアル作りを進めていく」：今年度はマニュアル作りを進めることができ、請求などの事務処理手続きもダブルチェック体制を作る共にマニュアルも作成できた。 ・ 「必要なお子さんには他事業所のスタッフに同行の機会を図る」：コロナ感染拡大の影響や多機能事業所職員の人員に余裕がなく、訪問同行の機会を作ることはできませんでした。 ・ 「限られた時間の中で効率よく支援を届ける工夫を行う」：提供できる日時が限られる中ではあったが、訪問の仕方や情報提供の仕方を工夫し、学校との連携を損ねることなく支援を届けることができたと考えられ、概ね達成できたと考えられる。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後何がいつどうなっても大丈夫なように引き続き訪問支援のマニュアル作りを進めていく。 ・ 学校依頼で始まる事業でないため、支援が必要なお子さんでも先生のニーズが薄い、もしくは無い場合に、現状の共有しかできていない現状があるが、学校の先生の質もかなりばらつきが多く、学校によって届けられる支援に差が出ている。 ・ 訪問支援員が一人で業務を行っているため、多機能事業所の他部門で何かしらのサポートが必要になるとすぐに業務が滞ってしまいがちな側面がある。 		

事業所名	ゆうショートステイ とれ☆きゃん	管理者	豊田 和浩
_____	_____	現場責任者	三倉 拓己
<p>令和4年度の実施総括</p> <p>令和4年度も日中一時支援、短期入所と2つの事業を並行して行った。</p> <p><日中一時></p> <p>日中一時支援事業では、親御さんや他事業所、支援学校との積極的なコミュニケーションを意識して、情報共有や面談を通して各拠点でうまくいったことの共有を行った。とれ☆きゃんでの対応やうまくいった場面、困った場面などでの本人の姿と、ご自宅、学校、他事業所での姿をそれぞれ確認することができ、本人が混乱しないように統一した支援方法を模索する機会が多くあった。とれ☆きゃんの支援方法に共感、協力してくださる方も多く、より本人を中心に多職種や保護者が連携した支援ができる場面が多かった。日中一時のスタッフの捻出が勤務シフト上難しい場面が多くあり、特に長期休暇で昨年度受け入れられた日に受け入れができないなど、人員不足に伴う弊害が発生した。</p> <p><短期入所></p> <p>定期利用者の利用中止やスタッフの退職に伴い、女性の利用がストップしてしまった。その為利用人数が減少した。年度途中から新規の受け入れも行ってきたが混乱なく穏やかにとれ☆きゃんを利用してくださっている。年度初めからスタッフ間でのコミュニケーションの活発化とスタッフの心労軽減を図り、責任者を中心にZOOMでのMTや現場での細かい情報交換の回数とスタッフ間での交流を増やした。勤務上どうしても1人で複数人を対応する状況が多いことと、変則シフトのためスタッフ間で悩みや意見の交換がしにくい環境であったが、今まで意見出しの少ないスタッフが利用者さんの支援の組み立てに関する意見を積極的に発信したり、自ら働く上でのご自身の不安な部分を伝えられるようになるなど、現場スタッフと責任者スタッフ間で昨年度以上に意見交換が活発に行われた。</p>			
今年度の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・日中一時では、他機関や家庭との情報交換の場を設定したり、面談を行うなど各拠点との交流を活発に行った。本人に対しての支援を可能な限り統一して行う動きができた。 ・短期入所では途中イレギュラーの受け入れ態勢の変更があったものの、スタッフ間でのコミュニケーションを意図的に増やす機会を多く設定し、意見出しや検討など活発に行いながら受け入れ・支援を行うことができた。 		
事業所の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフの人数が少なく、特に夜勤に入るスタッフが限られている状況。突発的なスタッフの休みがあった場合にフォローを行う際の超過勤務などが発生。特に女性の宿泊対応ができるスタッフが安定せず、年度途中で女性の受け入れを中止する事態になってしまった。 ・日中一時の受け入れ対応が可能なスタッフの捻出が勤務シフト上厳しく、昨年度の長期休暇で受け入れられた日が対応できないなど人員不足の弊害が発生した。 		

本部事務局 担当 浅田多世

法人運営のため、総会、理事会等の準備・運営を行った。法人の事務局として会員の管理、会報の発行、法人内の経理・労務管理などを行った。

- 現場責任者会議では、議事録を作成し出席できない者への共通理解を図った。
- 新型コロナウイルス関係の休業などの対応を行った。
- 移転に係る事務処理を行った。

常勤兼務1名、非常勤専従2名

会員動向

令和4年度会員の動向は以下の通り。(令和5年3月31日現在)

近年会員数の減少がみられるため、ゆうの活動を知っていただき、会員仲間を増やしていくことが課題である。

なお、公的な福祉サービスのみの利用者は会員数に含まれていない。

正会員	37名
利用会員	101名 (個人会員 71名 家族会員 24名 団体会員 6団体)
賛助会員	47名

会議等の開催

理事会の開催	5月17日
総会の開催	5月21日

委員会

研修委員会	スタッフ全体研修の内容の検討、及び準備等を行った。
安全衛生委員会	アンケートの実施を行った。
権利擁護委員会	現場責任者会議で権利侵害報告書の検討。虐待防止研修の実施。
防災委員会	防災研修、マニュアルの確認、防災備蓄品の確認を行った。